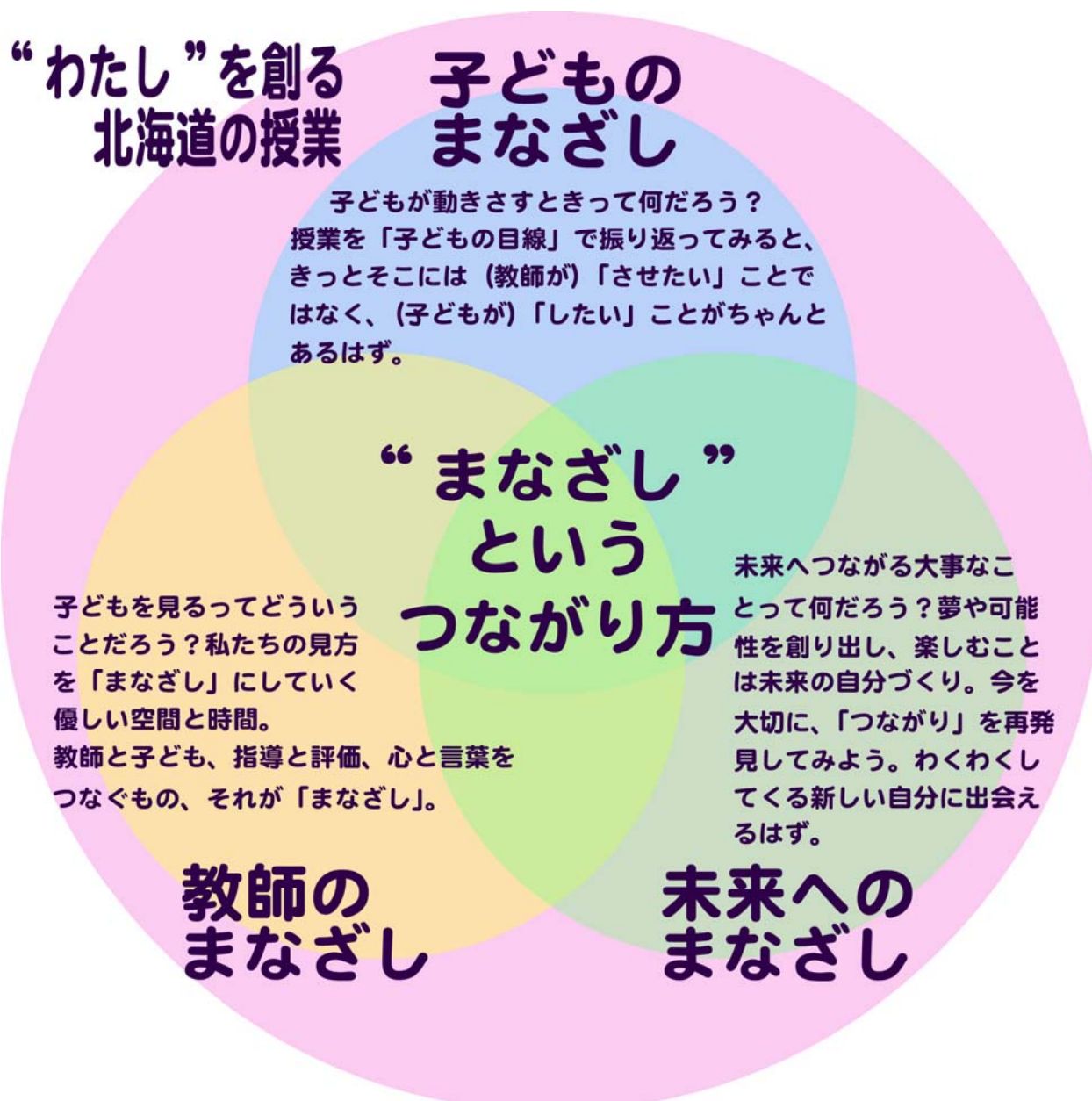


## 授業研究「扉」について Ver.8

### 1. キーワードは“まなざし”



これまでの授業研究では、どちらかという機軸（つくる・みる）（図1参照）を内容面で捉え、学年の発達に合わせて活動の内容、つまり題材を考えることが多くありました。教材を研究し、教科の目標に準拠した題材を設定し、授業を通して子どもたちの活動を評価し、授業改善を行うといった内容優先の発想です。

しかし、今日、授業を教師側（題材側）から一方向で見るのではなく、子ども側（資質や能力を発揮している状態、活動の過程）から見ていくことが重視されています。授業づくり、授業評価の視点として再確認していく上では、「何を何でつくるか」という個の活動を見つめるだけでなく、「どのように思い、どのように自他の思いを交わしながら自分の形や色、美しさや面白さについての見方や考え方をくり出し出していたのか」という集団でのかかわり合いと表現や鑑賞の活動との関係をしっかり見つめることから、目指すべく授業像を共有していきたいと考えました。

つまり、どの校種、どの領域の授業をとっても、子どもたち同士のあたたかなかわり合いがあり、自他の表現と鑑賞の活動がつながり合い、教師と子どもたちの心のふれあいを感じる授業を提案していくこととなります。

## 2. 扉設定の基本的な考え

これまでもいろいろな議論を重ねて来ましたが、扉は、もともと授業改善の視点であり、私たちが議論の中心として話し合いの柱にしてきたものです。また、これまでの造形教育を振り返り、これからの後世へ伝えていく図工、美術の不易として確認する意味ももっていました。時代の要請としての「旬な話題」にもふれつつ、造形を語る仲間の、造形を学ぶ仲間の「最新」でもありました。

そこで、本大会の扉を設定するにあたり、今一度図工、美術における基本に立ち返り、「造形教育はなぜ大切なのか?」「造形教育が担う人づくりの要素とは何か?」を再考してみることから考えてみました。

子どもたちは小さな頃から造形的な表現の活動に親しみ、自分と外界をつなぐ関係性を学んでいきます。言葉を話せないうちから、なぐりがきや見立てなどをしながら、自分の知っていることやものを表現していきます。表しながら意味が生まれ、またその意味から表したいことやものを捉え直していくのです。これらの成長には、自分のまわりにいる他者からの反応も大きな意味をもっています。共感的に微笑んでくれたり、驚いてくれたり、また時には、意味を付け加えてくれたりもするでしょう。このように自分の表現したことを他者が受け取り、また受け取ったことを他者へつなげる、というような人と人とのつながりの仕組みの中で相互理解や自己主張、多様な価値の理解を学んでいきます。つまり、造形的な表現や鑑賞の活動を通して、個人の造形的な価値を創りながら、他者とも一体的に相互の価値を創り続けるわけです。言い換えるなら、人間関係を築き合う力を育てることとも言えるでしょう。また、昨今話題の生きる力につながる学びであるとも言えま

す。このような図工、美術が人の心をつくり、育むといった基本を扉につないでいきます。

大会では、授業でも提言でも、総力を挙げて私たちチーム北海道の考える人づくりの造形教育を提案しながら、これからの図工、美術につながる「未来へ残したい図工美術宣言」を発信していくことにもなります。これからの未来へ受け継がれ、大切にされていくべき内容を参会のみんなと共有し、共通運解かをはがれたら素晴らしいと考えました。

### 3. わかりやすい扉

また、扉を授業づくりや提言のテーマと捉えると、どの授業者にもわかりやすく、取り組みやすいものでなくてはならないと考えました。どの授種でも、どの領域でも、自他の授業をどこかの扉から捉え直し、また逆にどの扉からでも授業を信管付けることができるということになります。

各扉はあくまでも授業をつくり、見直す際の重点であり、その重点項目以外は全く関わらないという訳ではないので、それぞれの授業の主張で大切にされるべき要素の中から明確に重点化を図った視点（＝扉の主張）を分かりやすく伝えていかななくてはならないとあるうと考えます。

どの扉からでも、授業をのぞき、捉え直し、よりよく改善していくことができるので、自他の授業を「扉」から分析的に見てみることで、より具体的な改善点が見えてきます。この授業の改善点は、1つの授業をよりよくするための成果と課題といった性格だけでなく、授業づくり全体、図工、美術全体にとっての重点課題として確認される視点となると考えます。

### 4. “わたじを創る授業を扉でつくる大会に

本大会の“わたじを創る造形教育の視点は「自立」と「共生」です。そして、この自立と共生を具体的に可視化するのが、扉です。また、扉は、自分自身の授業観や子ども観、指導観、評価観…などの教師としての見方や考え方を問い直す場にもなるわけです。様々な都道府県大会に参会したことがあるであろう、多くの参会者にも、今一度自分の授業観を見つめ直し、この北海道の地でこれからの図工、美術の未来を見つめた議論を楽しんで欲しいと願っています。もちろん、私たち北海道の仲間も、あたたかな人づくりをめざす北海道の図工、美術を存分に提案したいと思うのです。

## 5. 扉構想図

		つくる・みる (表現や鑑賞)				
		(北海道の主題) 自立				
		(札幌の主題) あったかい・心の発動				
		幼稚園	小学校	中学校	高校	大学
共有・つながり (共に学ぶ)	“わたし”をつくる 北海道の授業					
	(北海道の主題) 子どものまなざし	<ul style="list-style-type: none"> <li>授業を子どもから見直す</li> <li>全学年の表現、鑑賞の授業</li> <li>動き出す子ども、表したい子どもとは</li> <li>目標、指導について再考する</li> </ul> <b>子ども目線</b>				
	(札幌の主題) 教師のまなざし	<ul style="list-style-type: none"> <li>評価という視点で見直す</li> <li>子どもの資質や能力をどう評価するか</li> <li>具体的な評価方法と評価内容の再考</li> <li>子どもを育てる評価とは</li> </ul> <b>評価</b>				
	未来へのまなざし	<ul style="list-style-type: none"> <li>図工、美術をつながりから見直す</li> <li>人とつながる授業の在り方</li> <li>美術館、地域、社会とのつながり方</li> <li>つながることで見えてくる図工、美術の本質</li> </ul> <b>連携</b>				

## 6. 各扉について

子どもの  
まなざし  
扉 1

これまでの授業は、教師の「させたい」ことをしているのではないか。子どもが材料やテーマに出会い、感性を働かせて動き出すとき、そこにはどんな「秘密」がおるのだろうか。子どもの視点で授業を再検証してみよう。子どもの視点で授業を見つめてみると、そこには、見ているようで「見えていなかった」子ども本来の学びの過程がかくれているのです。

教師の  
まなざし  
扉 2

子ども理解、つまり評価を見直してみたい。指導の具体は評価による子どもの理解からつくられていきます。また、目標に向かう指導の具体的な現れとしての評価という意味もあります。具体的な手法、視点を含み、実際の子どもの姿と、その価値付け方を交流することで、図工、美術のねらいや達成の度合いがより客観的に見えてくるのではないのでしょうか。銃把の時期だからこそ。

未来への  
まなざし  
扉 3

世界とつながる国際化社会。その中でも様々な価値にふれ、自分の価値を創り出していく力はたいへん重要です。図工、美術が担う学力は、まさにこれから幻世の中で大事になるもの。美術館や地域の美術に触れたり、教育の中でも学校種をまたぐ連携の在り方を考えたり、可能性は無限です。様々な取り組みをこれからの可能性として、発信する機会になればと考えます。